
背中同士

市丸乱菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背中同士

【Nコード】

N7789H

【作者名】

市丸乱菊

【あらすじ】

仕事をサボる松本乱菊さんの後ろには、幼馴染が……。そして周りに気付かれないように話されます。

「それにしても暇ねえ……………」

実は仕事をサボってるのだが、本人は暇らしい…………

十番隊副隊長、松本乱菊さんです。

赤い大きいすに腰をかけて、そこにみたらしのお皿を置いて叫んだ。

後ろにも人が座れるといった、昔なじみの団子屋。

「おばちゃんーんっ！みたらしおかわりっ」

手をあげて店の人に言う。

「乱菊ちゃん…………。またあのちっこいけど怖い隊長さんに怒られるよ？」

店の店員はヤレヤレと言った表情で、おかわりのみたらしを3本お皿に盛って持ってきた。

「だいじょーぶだいじょーぶw怒るとちょっとだけ怖いけど、そういうところからかうのが楽しいんだから」

おばちゃんも今日は客がないからあたし居たほうがいいでしょー？www」

そしておかわりのみたらしをぱくつと口に入れた。

「やっぱおいしいっ♪仕事なんかやってらんないわよねー……ふー……」

手をつき、空を見上げた。

「十番隊副隊長さん。ちゃんと仕事せなあかんよ？ちっこい隊長さんにまた怒られんで？」

背中のほうに人が座り、その声の主が幼馴染だと知る。

「いつ市丸隊長؟؟？ちゃーちゃんと仕事してますから……」

びつくつとした松本は後ろも振り向けず、口を尖らせて下を向いた。

「おばちゃん。みたらし1皿よろしゅうな♪ここの美味しいねん
っ」

市丸が手を挙げて店員に声をかけた。

「はいはい。おや……？ギンちゃん。珍しいねえ。死神になり立ての時はよく来てくれたけど。」

そういえばその衣装……隊長になったんやねえ！！おめでとっ。

っ

ニコニコしながらお皿を市丸の横に置いた。

「ありがとう♪急にここの団子食べとうなってんw」

「ごゆっくり」

1つ手にとり、みたらし団子を頬張った。

「やっぱ、ここの団子おいしいなあ・・・乱菊。」

さっきまでの声ではなく、小さい声でボソツと言った。

そして市丸も松本を見る事はなかった。

「何か御用ですか？」

少しうつむき加減で、松本さんもボソツと聞いた。

心臓が張り裂けそうなほど高鳴る。

幼馴染の二人だが、死神になってからはほとんど会話もなかった。

幼い頃一緒に住んでいた二人だが、度々姿を消す市丸。

そして市丸は、1年で真央霊術院を卒業して、周りから天才と呼ばれていた。

そして入隊と同時に席官になってしまったのだから。

「団子が食べとうなっただけや・・・」

市丸も小声で応える。

正直言うと、周りに客がいなかったからである。

当然、松本に会いに来たなどとは言えなかった。

「そうですか……」

お互い背中を向いてるので、二人は表情を伺えなかった。

声もおばちゃんに聞こえないようにお互い小声で……。

「そうそう。今月の精霊艇通信みたで。」

「あたしも見ましたよ。」んなアホな」……」

「一応みてくれてんのやwおおきに」

「いえ……本当にアホなネタばかりですよね……」

お互いに意識して見ているようである。

「だからちゃんと題名もつけてるやないの。んなアホなってwww
」

肩を震わせて笑う。

そのどさくさに紛れてかわからないが、少し奥に腰をかけた。

二人の背中が微妙ながらくつついた。

「え？」

松本はびっくりしたが、逃げなかった。

逃げたくなかったのかもしれない。

久々の市丸の温もり。

そして市丸も同じだった。

「ちょっとだけ。このまま・・・ええやろ？」

「うん・・・」

二人の鼓動が高くなる。

それをお互い気付かれないように抑えようとするので、言葉が思い浮かばない。

その沈黙を破ったのは、市丸だった。

「なあ・・・乱菊。」

「ん？」

「あのポスターのさ、服、肌見せすぎとちゃうのん……？
ポスターに限らずやけどな……いつもやんか」

「え？？だってモデルだもん……」

「せやなあ。そう言ってしまえばしまいやな……w」

「もしかして妬いてるの……？ギン？」

意外な言葉に思わず核心をついてしまった松本。

その言葉に市丸は困ってしまった。

「どうやらなあ……自分でもわからへん……」

両手をつき空を見上げる市丸隊長。

ますます背中がくつついた。

松本さんも市丸さんもお互いの温もりを意識した。

もう少しこのままで……。

二人の気持ちだった。

「干し柿食べたいなあ。」

市丸が言った。

「うん．．．．．」

「また十番隊に持っていくわ。」

9月29日に．．．．．。」

「んじゃあ、あたしは9月10日に干し芋持って行こうかしら」

「．．．．．はー。昔の乱菊は可愛かったのに
なあ．．．

なんでこうなってんやろ．．．．？」

「なんでかしらね．．．．」

乱菊の脳裏に市丸が居なくなった時のことがフラッシュバックで蘇った。

「ほな。そろそろ行くわ。」

人來そうや．．．．。」

「．．．．．うん。」

背中が離れると背中が少し寒かった。

顔は見る事ができなかったが、とても幸せな時間を過ごしたように

感じた。

「おばちゃん。おあいそよろしゅう」

「あいよー」

小銭を渡した。

「また来てね。ギンちゃん」

「また来るわ。おばちゃん」

そうして市丸は歩いて行った。

「おばちゃん。あたしもおかんじよーーーーー」

「乱菊ちゃんのはギンちゃんが払ってくれたよ」

え？

「まじで？ラッキーwんじゃおばちゃんまたねー」

手を振ってご機嫌に去っていく松本の姿がありました。

そして、近くの木の上に一人……

その場に出るに出られない一人の隊長の姿がありました……。

「出るに出られなかったじゃねーかつ!!」

まーっもーとーっ!!」

終わり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7789h/>

背中同士

2010年10月9日17時25分発行